

水沢勉委員（美術評論家）

今回会場で作品を拝見して、野外彫刻の全体の技術的レベルが非常に上がっているという印象が強く、それに順位をつけるのがとても難しいというのが最終的な印象でした。

どの作品も非常に熟練した技術の美しさがあり、大賞になったものはそういう意味で言うと技術的には少し不安もありますが、何かに挑戦するというインパクトを強く感じました。若い世代に賞を授与することもとても大事だと思いました。

植松奎二委員（彫刻家）

今回初めて二次審査に参加できて楽しかったです。去年、模型で選考していて、一体どんな作品になるのかがイメージできませんでした。今回、会場で見ると模型とは全然印象が違っており、模型から実際の作品を選ぶ難しさを感じました。実際にできてきた作品は、とても力強く、会場にも合っており、緑のなかで彫刻が映えて見える。そういう感じがして選考に関われて本当に良かったと思い、彫刻する、作る意思を強く発信している作品群との出会いは楽しかったです。

2点あった石の彫刻「IMAGINE」と「Hito_ita-k021 Jun.024」については、僕は、今までの彫刻、いわゆる刻む彫刻という意味での本当の彫刻の、一つのまた違う形の見方ができたと思います。石の彫刻でこんなこともできるのだと彫刻の新しい可能性が見れました。

「Press block」についても、若い人で、ものすごいエネルギーがあり、表現することの実験的、冒険的、可能性を作品から感じ取れました。これからもどんどんやっていけると思うけれど、作品を末長く残していけるようにした方がいいのではないかと思います。その方が作家にとってもいいのではないかなと思います。これからの作家活動期待しています。

「十二の物語」は鉄という素材を軽やかに彫刻に作り上げ、360度の空間に刺激を与え、作者とともに見る人々が12の物語をイメージする場がありました。見る人々に視点の違いから新たな感動を呼び覚ましたと思います。

一つずつの作品の感想はあるのですが賞に入った人も入らなかった人もこれからも自分の仕事に自信を持って、新しい発見を試み、新しい意味を持った作品を作り続けていかれることを願っています。

ここUBEビエンナーレからの新たな始まりを！

河川龍夫委員（現代美術家・筑波大学芸術学系名誉教授）

今回は、僕自身が作らない作品や、少し憧れるような作品を選んでみました。大賞に選ばれた作品「Press block」は作品も若く作者も若いこと。その影響と反応により今後若い出品者が応募してくるのではないかと期待されます。作品については作品自体が持っている未知の可能性にひかれました。

河野通孝委員（山口県立萩美術館・浦上記念館館長）

昨年的一次審査において、一次審査通過作品を選ぶのに大変に苦労しました。マケットを見ただけで完成作品を想像するということが非常に難しかったからです。

その中で、「完成作を見てみたいな」と率直に感じさせてくれた作品が、今回の大賞作となった「Press block」でした。とはいえ、同時に「本当に作品として成立するのかな」という不安を感じてもしました。さて一年が経過し、実際に完成作品を前にして感じたのは、見たこともないような不思議な物体が天に向かって屹立する圧倒的な伸びやかさです。屋外で陽光を浴びながら何かを作り上げていく楽しさや細部にこだわらない荒々しさが、技術的な不安定さを凌駕し、屋外彫刻ならではの魅力にあふれていたと思います。

一方で、「IMAGINE」もまた、捨てがたい魅力にあふれていました。形象そのものは、命の芽吹きをダイレクトに感じさせるものです。ただし、それは既視感があり、ステレオタイプに陥る危険を孕んだ形ともいえるでしょう。とはいえ、作家はそうしたリスクをものともせず、大理石を巧みにコントロールし、極めて率直に、力強く、そして優しく、生命が形作られるときの豊饒さを浮かび上がらせることに成功しています。また、作品が、高さ約3m、重さ4tの大理石だけで完結しているわけではなく、この作品に観客が触れることによってはじめて、もうひとつの作品が出現してくるような未完の魅力をもたえており、屋外彫刻ならではのおおらかさを内包する作品であると感じました。

不動美里委員（姫路市立美術館館長）

今は、不安な時代で同時に戦争も起こっており、大変ないきづらさを国内外で感じている人たちが大勢いるなかで、ギネス世界記録™にも認定された歴史あるUBEビエンナーレとして、何が大賞に選ばれるのかというのはとても重要なことだという認識を審査中にも感じておりました。そのなかで、若い方で、多少の不安要素もあるかもしれないけれど、そのチャレンジ精神に審査員がかけたということは、とても素晴らしい経験をさせていただいたと思います。

今回の出品作品はそれぞれに多様な素材や技法、技術を駆使する表現がみられて、これまでの様相と少し違う印象をもちました。海外からの出品者もおられますし、それぞれ深いメッセージ、色々な彫刻の言葉が聞こえてくるそういう内容になっていると思います。

野中明委員（広島市現代美術館副館長）

初めて選考の場に加えていただきました。マケット審査の時は今ひとつピンと来ておらず、何か食い足りないところがあり、実際のところ本番の展示はどうなるのだろうと思っていました。でも、今日ちょっと早く来て会場を一人で歩いた際の印象は、その時のものと全然違っていました。作品一つ一つがきちんとした佇まいをもち、場にもなじんでいて、クオリティも高く、とても嬉しくなって「彫刻っていいな」という思いが自然に湧き起こりました。

いずれの作品もしっかりとそれぞれの魅力を放っていて甲乙つけ難く、審査は困難でした。惜しくも賞からは漏れたものの、美しい桜色が印象的な「サクラの柱」や鉄の重量感と形状の関係が絶妙な「カノ女の父」などは個人的にすごく惹かれた作品です。

大賞をとった「Press block」は成形のプロセスを表現に取り入れつつ素材の特性そのものをストレートに造形化することに成功していて、そこに大きな魅力と可能性を感じます。一方で、それがあまりにもストレートすぎることに若干の怖さを覚えるのも事実なのですが、そのような作品を大賞とした審査の場

において、次回から出品層に変化が生じるかもしれない、UBE ビエンナーレに新たな展開が生まれてくるかもしれない、そんな予感を持ちました。そういう場に立ち会わせていただいたことを感謝したいと思います。

藤原徹平委員（建築家・横浜国立大学大学院 Y-GSA 准教授）

今回は水沢さんの発案で、審査員全員で一緒にめぐるという審査の試みを実施しました。まずそれが非常に良かったのではないかと思います。同じ彫刻を皆さんが、色々な風を感じていることが伝わってきて、1人で見るとより一つ一つの彫刻を多面的にまた深く見れたなと感じています。

私は本選の審査員をするのは6回目ですが、UBE ビエンナーレの歴史の厚みというか、多様な野外彫刻の方向性がある完成度をもって結実しているように感じました。どれもコンセプトは異なるのですが、クオリティも確かで、コンセプトが明確に伝わってきます。子供たちも反応して、すでに初日から秘密基地のようにになっている作品もありましたし、どの彫刻も風景にもすごく溶け込んでおり、全体的に質が高いなと思いました。

世界中から、色々な世代のアーティストが参加しているのも、すごく良いと思います。多様な価値観が、ものとして現れている。それが彫刻を通じて、公園の風景になる。現在文化や文明の対立が世界各地で戦争というような悲惨な形になって現れていますが、多文化主義は UBE ビエンナーレのように風景として発露することが理想なのではないかと改めて感じます。

賞に選ばれた作品では「Hito_ita-k021 Jun. 024」の装飾が平面的な段階から立体として捻れて変化していく感じは、マケットでは分からず現物を見てその展開に驚きました。彫刻の原点を見るような思いがしました。希望した展示場所も適切で、場所性への応答も見事だと感じました。

「IMAGINE」と「十二の物語」の物質と造形、その技術の完成度の高さには大変驚きました。でもどこかまだ力が余っているというか、さらに大きなスケールの作品への飛躍が期待できるんじゃないかなとも感じています。

賞には選ばれていないのですが、個人的に面白かったのは「Yakumo-Lafcadio, Doric Torii」です。ギリシャからコンクリートの柱が運ばれて鳥居として立ち上がる。非常に面白いコンセプトでまた風景としても非常に魅力的です。「宇部版洛中洛外図屏風」も絵画のようであり、環境の道具のようでもある。彫刻の新しい側面を示しているように思いました。あるいは「サクラの柱」の素材の探求も非常に宇部の歴史を感じます。見たことない物質性と即物性に魅力を感じます。「カノ女の父」も道祖神のような非常に凝縮された良い形をしていて、感心しました。例年ならどれも入賞だと思いますが、今年は全体のすごくレベルが高かったので、残念ながら入賞を逃してしまっただけです。

そうしたレベルが高い争いの中で大賞に選ばれた「Press block」は、今年の大きな特徴の質の高さや、完成度とは異なる評価軸だと思います。発想の新しさ、次の造形の可能性をつくるんだという革新に向けたベクトルを感じます。今までの価値を壊し、新しい動きを生み出す。そういうアプローチを応援しようとする UBE ビエンナーレは、素晴らしいなと改めて今回思いました。

展示委員の立場としては色々な問題が起きそうだなとは思っているんですが、まあそれも含めて新しい文化をつくっていくきっかけになるとおもしろいなと、全体としては前向きに捉えています。

日沼禎子委員（女子美術大学教授）

審査の段階では安全面やメンテナンス、移設による再設置の際の状況などを考慮しながら審査のプロセスに関わりましたが、彫刻の新しい可能性、宇部が常に挑戦の場であるということをめぐる審査委員の先生方との議論によって導き出された結果に、最後にはとても納得し、審査を終えることができました。

UBE ビエンナーレの歴史の中で、これまでも色々なチャレンジがあったと思いますが、例えば竹腰耕平さんの「宇部の木」が大賞を受賞した際の議論でも賛否両論の議論があったとのこと。現在、その作品は撤去されてしまいましたが、若い作家の新しい表現を評価し、新しい彫刻の可能性を示したことは重要であったと考えます。

危険性、耐久性や破損への懸念はパブリックアートには、必ずついてくる問題です。しかし、人間の作ったものはいつかは壊れてしまう存在であるということ、そうであるからこそ、アートの魅力、彫刻の魅力があるのだということ、市民と共有し、考え、議論し、育てていく。UBE ビエンナーレが果たす役割はそこにあるのではないのでしょうか。

また、現代彫刻に多様な、新しい表現が生まれ続ける状況の中で、むしろ石という素材の力をシンプルに際立たせ、原初的表現、命のはじまりを想起させる作品として、Kyuichi Sato「Hito_ita-k021 Jun. 024」、藤井浩一朗「IMAGINE」にも強く心を動かされました。

そして、今回は実制作された15点のうち5点は海外アーティストの作品で、国際展としての多様な表現に触れていただく機会ともなりました。その中でも Chatchawan AMSOMKID「The Carapace」、DAM Dang Lai「The Seed」は、とりわけ力強く有機的なエネルギーを放っています。オープニングの日には、多くの子どもたちが作品を取り囲み、生き生きと遊びまわる姿が印象的でした。

高橋咲子委員（毎日新聞社東京本社学芸部記者）

水沢先生監修の「彫刻世界」という展示が行われていますけれども、彫刻を中心に周囲に世界が生まれているということ、作品を見ながら改めて感じていました。彫刻ですから、空間に意識がいくというのは当然だと思うのですが、野外にあるということで、自然や文明などの大きなところに目が向かうというそのプロセスがやはり面白いなと思いながら見て、歩いていました。

実見した作品には海外の作家が今回多かったと思いますが、日本あるいは宇部の風土に思いを馳せながらも、その文化をまたいで発想を広げていく、その過程そのものがやはり、そのもの自体が意義深いなと思いました。とはいつつ、そんな従来の発想とは一味違うのが、大賞をとった渡久地さんの作品だったと思います。将来的にさらに大きな存在になって、今回ギネス世界記録™に登録された UBE ビエンナーレで、また新しい歴史を作っていただけたのではないかと期待したいと思います。